

会 議 録

会 議 の 名 称	令和5年度第2回弘前市文化財審議委員会議
開 催 年 月 日	令和5年11月19日(日)
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後2時00分から午後3時00分まで
開 催 場 所	弘前市岩木庁舎2階 会議室3
議 長 等 の 氏 名	委員長 関根達人
出 席 者	委員長 関根達人 委員 岩瀬直樹 委員 岡田俊治 委員 内山淳一 委員 小松勇 委員 瀧本壽史 委員 中村琢巳 委員 古川祐貴 委員 山田巖子 委員 須藤弘敏
欠 席 者	なし
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	文化財課長 石岡博之 同課長補佐 小石川透 同課文化財保護係長 村上真知子 同課埋蔵文化財係長 蔦川貴祥 同課総括主査 一戸修 同課主査 棟方隆仁 同課主査 清野優雅
会 議 の 議 題	(1) 金剛力士像の文化財指定可否について (2) その他
会 議 結 果	別添議事録のとおり
会 議 資 料 の 名 称	・ 弘前市文化財指定申請の調査報告書 ・ 石戸谷理右衛門の履歴 ・ 写真
会 議 内 容 (発言者、発言内容、 審議経過、結論等)	別添議事録のとおり

## 【会議内容要旨】

### 議題1 金剛力士像の文化財指定可否について

須藤委員 阿形像の修理前修理後の写真資料3-1にございますように、修理前は当初の彩色の上に三層にわたって彩色が塗り重ねられておりましたので、単に色合いが違っていただけではなく、まるで筋肉や血管の凹凸がわからない状態になっておりました。これを今回、丁寧にすべて除去していただきまして、ご覧のように、筋骨隆々たる力士像の姿がよくわかる。

名称は金剛力士立像。通称は仁王像と申しますが、一体一体については東大寺南大門のものに代表されるように正式には金剛力士と申しますので、指定名称は木造金剛力士立像とします。

員数は二軀一対。品質構造は、木造寄木造彩色玉眼。

今回の修理で、制作年代が承応二年（1653）で五重塔よりもさかのぼる制作年が明確になりました。

次の、作者及び銘文のところにもあるように右近という仏師の作であることも判明いたしました。

ということで氏素性、それから制作時の年代がはっきりしたことが今回の指定について大きな根拠になるかと思えます。

大きさは像高で、阿形が277.3 cm、吽形が275.1 cm。

所在地は弘前市大字銅屋町63番地の最勝院。

次の構造・彩色のところ、阿形も吽形も同じ仏師工房でほぼ同時に造られたと思われませんが、少し不思議な違いがございます。一つは頭部の作り方で、阿形は3つの材を前後でくっつけている形で間が入る。普通はこれくらい大きさであれば前後の二つ割なのですが、阿形像は3つの材を用いており、吽形像は2材を組み合わせております。それ以外の首から下の体躯の木寄せの仕方はなかなか複雑でありまして、どこまでつながっているのかで阿形像、吽形像で多少違いがあります。それから、左右から材を寄せるのですがその寄せ方も全く同じということではないという特徴がございます。

問題は阿形像吽形像通じて同じことなのですが、表面全体が錆漆、黒漆を施された上、肉身部はベンガラ漆塗り、着衣部の裾裏は白茶色で彩られている。これは今回、後補の後から塗られた彩色を全部落とした段階で分かった。後補のベンガラを落とすと、同じベンガラ塗でも色調が全く異なっており、非常に落ち着いた渋い色調となりました。

調書2枚目の現状と創造及び沿革ですが、重要なのは一番上の部分で、眼球部分が脱落していて、本来内部から行うべき補修を外側からとありますが、本来仏像の目は裏からはめ込んでいます。よって修理しようとする解体修理になりますので、正しい方法で修理できずに、半球状のガラスを埋め

て刻<sup>こく</sup>華<sup>か</sup>などのパテ状の充填剤で外側から固定する形で行われたため眼球の安定が非常に良くない状態であった。この状態は、先代住職よりも前からこの方法を行っていたと思われるわけですが、弱くなってしまい、めったにないことですが目の周り周辺10センチくらいまでがぱっと取れてしまったということです。

それが解体修理のきっかけとなり、当初は頭部だけ取り外して行う予定だった修理ですが、お寺から運び出す時点で左腕が抜けてしまうなど、全体が緩んでしまっているの、頭頂から足先まで全部を解体する修理を行うしかないということになり、期間も予算も大きくなってしまった。しかし結果的にこの像を後々に残すために必要な修理が行われ、なおかつ体内から、作者及び修理の銘文がでてきて1653年に造られ、1799年に大幅な修理が一度行われている。その後おそらく明治以降に一度、最後、昭和に一度修理が行われたと考えられます。

承応2年というのが一つ問題になってくるのですが、五重塔が完成した寛文7年よりも10年以上早いこととなります。色々比較検討してみた結果でも、当初から旧大円寺境内に五重塔よりも先立つ形で設置されていたということは確定したと思われま。ただそうすると、五重塔ができてから伽藍境内を守る仁王像を建立するというのではなく、逆に伽藍境内地の空間を守るためにこの金剛力士像が安置され、その後五重塔が造立されたというプロセスになります。この点に関しては今後歴史の方から検討がいただければと思います。

最勝院での公開時にも申し上げましたが、当初の位置が現最勝院の東南の隅になっていることが問題提起として挙げられます。現在の新仁王門の位置だと最もよさそうに思えるのですが、当初の位置は境内のどんづまりの位置に仁王を設けている。当初の大円寺の伽藍はほとんどが東向きであり、現在の本堂は北向きです。当初は大方のお堂は東向きでしたので、とすると東側に仁王門が設けられてもおかしくはないのですが、それならそれで、伽藍のセンターに当たる所に坂、石段を築いたらよかったと思うのです。そうせずに東南の隅になったのには宗教的、政治的な何か意味合いがあったのだろうということも考えられます。しかしこれは、今回の私の報告の領分を過ぎたことですのでそのことについて遡ることはいたしません。

新しい仁王門に修理後も納められたわけですがすけれども、元の仁王門も非常に重要で、弘前という町の成り立ちを考えたときに仁王門と仁王坂というのも非常に重要な景観でもありますし、弘前城下の町割りを考えた時にも非常に大きな意味を持ちますので、旧仁王門と仁王坂の保存についてもご配慮いただければということ添え書きのような形で述べさせていただきます。

そして、指定に価する特色および理由です。本像は17世紀半ばに当時の正統的な仏師により造られた堂々たる像であり、青森県下に現存する仁王像（金剛力士像）としては最古のものとして貴重である。これは銘文の無い御像を含めて県内にある御像と比較してみてもこの御像は明らかに一段と古いもので間違いございません。また、五重塔とともに弘前城下の形成にも重要な意義を有していて、市指定文化財にふさわしい。また、全面的な解体修理により安定した状態となり、今後の維持保存の上でも懸念はないということです。

その他参考事項として、右近は七条大仏師流という肩書で銘文を体内に残しております。七条仏師左京というのが当時の17世紀半ばの日本の仏師のトップで幕府の御用も務めております。自分はその一門であるということの名乗っているわけで、それは正統な仏師の末流なのだということを示しています。

現在同じ右近が造ったと考えられるのが、愛知県と和歌山県に残っているわけですが、どちらもこの金剛力士像に比べると小さな御像です。今回の御像は、現在分かっている中では右近の作品の中で一番大きなもので、仏師生活の中でも早い段階の作品であろうと考えられます。以上です。

事務局 寛政十一年に修理をした人たちにつきまして、情報が新たに出ましたのでご説明させていただきます。

資料3-1に写真を載せていますけれども、阿形像の後頭部から出てきました名札の中に書かれている、「施主塚町連中 細工繕石戸谷利右衛門 石戸谷富衛」という二人の名前が出てきています。どういう人が修理したのかが分かれば金剛力士像についてさらに解釈が進むものとして調べております。

石戸谷利右衛門の「利」の字が違いますが、確かに藩の記録に小細工人として出てくる人物でありました。寛政6年に長柄二番組に降格。これは国日記の方にも記事があり、「不届之儀有之」とあり降格しています。小細工人からいったん離れますが、その後寛政10年、この仁王像の修理をする前年に「心を入れ替えて、勤行もよい」ということで細工人手伝という形で復帰しています。その翌年、仁王像の修理を行いまして、最終的には細工人の肩書はつかないのですが、基本的には細工人として活動していたと思われます。文化3年には亡くなります。

名札の方にあった「富衛」という人物ですけども、藩の記録を見ると「富弥」で書かれております。こちらは利右衛門の息子でありまして、利右衛門が亡くなった後、遺料を受け継ぎまして、亡くなった父と同じく御留守居一番組御目見以下支配にいましたが、2、3年経つと小細工人、つまり石戸谷

家が本来就いていた役職につきまして、最終的には文政5年に亡くなるのですが、その前に「小細工小頭」ということで小細工方のトップに就きまして、その他にも「作事吟味役格」などかなり出世できた人のようです。このような人物が、金剛力士像の最初の大規模な修理に関わってきていたということがわかりましたのでお知らせいたします。

小松委員 衣服の部分は黒を塗ってからベンガラを塗る、ベンガラは亜鉄なので強さを増すのだと思います。その上からは漆は塗っていないのでしょうか。

須藤委員 ベンガラと漆を混ぜて塗っていると聞いております。後からの補修のベンガラはより強度の弱い接着剤でつけていたようです。下地に錆漆をしてから黒漆を塗るというのも仏像の定番で、その上に金箔をおす、彩色を施すというのはよく見られます。仁王像の場合は最初から雨風にさらされるのがわかっているのでベンガラの厚みが厚かったと思います。

内山委員 当初、髪の毛や髭が黒く彩色されていましたが、髻の部分は黒く塗って戻していますが、他の髪の毛の部分は当初どういった様子だったのでしょうか。

須藤委員 修理直前の髭や眉や頭髪は全て、前住職が書かれたものです。髻<sup>もとどり</sup>の部分は墨が塗られていて正面は金が施されているんですけども、ここは後の色ではなく、当初のものではないかもしれないが、最後の昭和の補彩ではないので、いじらずに残したという経緯があります。

内山委員 解体修理に際して、各部材の寄せ方や矧ぎ方について図面などは作られるものでしょうか。図面などが残っているのであれば、ここに追加しておいた方が後々、有効ではないかと思います。

須藤委員 図面はおそらく明珍さんの所にあるかと思います。修理報告書には、バラバラの部材の写真は残っていますので、どこが後補なのかはきちんとわかるとと思います。今回のケースでもパーツは数百点あったそうです。

山田委員 県内の仏像を調査された経験から、この仏像は県内の仏像ではどういった位置付けになるとお考えですか。

須藤委員 制作の事情と、制作者の詳しい情報が明らかになっているということ、修理過程のプロセスもわかってきたということで、御像自体の持っている、優れた主流派の彫刻であるということだけではなく、文化財として周辺情報を多く含んでいる重要な御像ではないかと思います。将来的には県指定になっても少しもおかしくないものと思います。

古川委員 名札や墨書きがあることで文献史料との突合せができるようになったというのは非常に良い点だと思います。松江城が国宝になるときも墨書が出てきたことにより、国宝に上がったということもありますので、そういったことができたのは良いなと思いました。

中村委員 旧仁王門を拝見すると2回ほど改造の後がみられます。小石川補佐から文政、嘉永の棟札があるという情報ももらっておりますが、その改造というのが格式を高めるみたいに彫刻的な削り物をつけるなど、デザインを高めるような改修をしている印象があります。仁王像と同じく、仁王門も修理を重ねて今に残るという来歴があるなと思っております。今後、仁王門や、上がった所にある太子堂など建築の面から幅を広げるようなことをできればと思っております。

関根委員長 須藤先生の調査によって仁王像の価値というのは明らかになったと思います。前回、最勝院で開いた1回目の会議の時に、申し上げたのですが、旧仁王門についてもいずれきちんと調査をされて、当初どういう状況であったかも含めて明らかになればよいかなど。あと、前回申し上げたのですが大鰐の大円寺の資料については調査されましたか。

事務局 申し訳ありません。まだそこまで調査しきれていません。

関根委員長 そこも是非調査していただくと、須藤先生、中村先生がおっしゃったことと関わってくると思いますので。

それと、修理前、修理後の写真がありますが、3Dデータはないのでしょうか。今後文化財に関して、3Dデータをとってもらえると、色々な活用ができると思います。修理の際にはもしかしたらやっているかもしれませんので、データそのものも最勝院や、教育委員会で管理されると活用のし甲斐があるかと思えます。

あるのかないのかの確認と、今後こういった機会には3Dデータをとってもらおうというのも活用を考えるうえで必要なと思いますのでお願いします。

ほかに何かございますか。よろしいでしょうか。では最勝院所蔵の木造金剛力士立像について、頂いた意見等ふまえて事務局には資料を調整いただき、次回で答申をおこないたいと思います。

**議題2 その他**      特になし

以 上